明日宿泊予定のフリアカの町も通過した。この町は創設25年の新興都市であるが、人口は25万人で今後もますます発展することが予想されている。町の印象は「針山の町」である。つまり、将来の建て増しを予定してどの建物も鉄筋を屋根の上に剥き出しのままにしているのである。中にはもうこれ以上建て増ししなくてもよかろうにと思える7～8階建ての建物にまで鉄筋が突き出してあった。都市の美観を損なう見苦しい景観だと思った。

フリアカの町の点景

「針山の町」の印象の残るフリアカの鉄筋剥き出しの建物

プーノの町の踊り子。プーノの町はお祭りの期間で至るところに祭りの衣装をつけた踊り子を目撃した。また祭りの人込み目当てペルー中のスリが集まっているとも聞いた。

2006年2月12日（日）

朝からティティカカ湖に浮かぶウロス島の観光である。ウロス島は現在23あり、一つの島には5～10家族がトトロで造った苫屋で質素な生活をしている。同じ島に住む住民は何れも血族である。ウロス島とは湖に自生するトトロと呼ぶ葦を積み重ねて造った浮き島のことである。

ウロス島に最初に住みついたインディオの人々は2000年前からであり、当時とあまり変わらない原始的で質素な生活をしている。

最初訪問した浮島ウマウタ島のトトロ舟

チチカカ湖の波止場周辺の点景

トトロ。葦の一種だが、畳表の材料になる藺草ともよく似ている。トトロは舟や、家や、マットレス、トイレットペーパーに活用されている。またトトラは3 ～5 分で4 m近くに成長する。

湖面に顔を出している自生のトトロと後方の白い建物はヒルトンホテル

ウマウタ島の住民が広げている土産物

スマキリ島の学校

ウマウタ島の長老

この湖に棲息する魚カラチ

ウマウタ島からトトロ舟に乗って次のスマキリ島へ向かう同行の人達

左は湖でとれた鯰科の魚カラチを焼いて干したもの、中はキヌア、右はじゃが芋

ウィニャイトトラ島の苫屋の屋根に設置された太陽発電器、小屋の中にはテレビが置いてあった。

浮島に植えてあるトトロ

チチカカ湖は塩分が1%あり、昔は外洋と繋がっていたが、アンデス山脈の地殻変動により、外洋とは切り離された状態となった。この湖は8、560平方kmあり、水深の浅いところは3m～4m、ボリビアとの国境付近では284mもある。琵琶湖の面積の約12倍もあるし、富士山よりも高い標高3、812mの高地にこのように大きな湖があることも、日本人観光客にとっては大きな驚きである。

チチカカ湖に棲息している魚は現在5種類である。アメリカよりもたらされた鱒の養殖が現在行われている。

チチカカ湖の波止場からモーターボートに乗って最初にウマウタ島を訪問した。次いでトトロ舟でスマキリ島を訪ね、再びモーターボートでウィニャイトトラ島を訪問した。

ウロス島の見学を終えて、標高3、900mの丘に残るシルスタニの石塔の墓群遺跡へ向かった。

ウィニャイトトラ島に別れを告げる

チチカカ湖とプーノ市街

シルスタニ遺跡の遠望

シルスタニには紀元前４００年頃、ティアワナコ文化とウカラ文化が栄えていた。11世紀にスペイン人がやってくると、プーノのコイヤ文化がインカ文化に征服され、インカの人々がチチカカ湖周辺に住みつくようになった。

見学した遺跡には11世紀に造られた、石を積んだだけのアイマラス王の墓、13世紀に造られたインカ様式の高さ12ｍの墓塔があった。墓に埋葬された財宝をスペイン人達が略奪するためだったのか、墓の正面は破壊されていた。太陽神殿の跡、月の神殿の跡も残っていた。

上はインカ様式の墓塔、下はプレインカの墓塔でアイマラス王の墓

高さ12mの墓塔、正面はことごとく破壊されている。

シルスタニ遺跡群。この遺跡には聖霊の宿る場所とされるワカの石も残っていた。

→

プーノからシルスタニへの道中で見かけた農家

ワカの石群

フリアカのレストランで食べたアルパカのステーキ

遺跡のある場所からの展望、動物はアルパカ

フリアカのマンココパック空港にある、マンココパック像（インカ初代皇帝）

シルスタニ遺跡前の土産物屋

昼食をフリアカのレストランで摂った後、フリアカのマンココバック空港からリマへ飛び、最初投宿したシェラトンホテルへ夕方到着した。

2006年2月13日（月）

7時にリマのホテルを出発して、車窓より沙漠の光景を眺めながらナスカの地上絵を見学するためイカへ向かった。約303kmの沙漠のドライブである。

海岸には貧しい人々の草葺の小屋やベニヤ葺きの小屋が立ち並んでいた。最初は草葺きの小屋を作り、お金が貯まるとベニヤ板になり、日干し煉瓦の家へと変わっていくという。養鶏所の鶏舎もそちこちに見かけた。また手入れのされている土地と荒蕪地の違いがはっきり判る土地の対比には人間の営為の素晴らしさを思い知らされた。

沙漠に建っている貧しい人々の苫屋

養鶏場

緑地と砂地が裁然と分かれている対比。緑地には水の配管が施されている。

通過したカナーテの町は1899年4月3日に日本人が最初に入植した所で今は緑豊かな農地に変貌している。昔は綿の産地であったが、現在では綿の畠は見られない。また通過したチンチャの町は黒人が住む人口2万人のワイン製造の町であるという。

航空機に搭乗するには絶好の無風晴天の条件に恵まれて11時過ぎにはイカの空港に到着した。

搭乗したセスナ機

離陸直後、イカ空港の上空より俯瞰

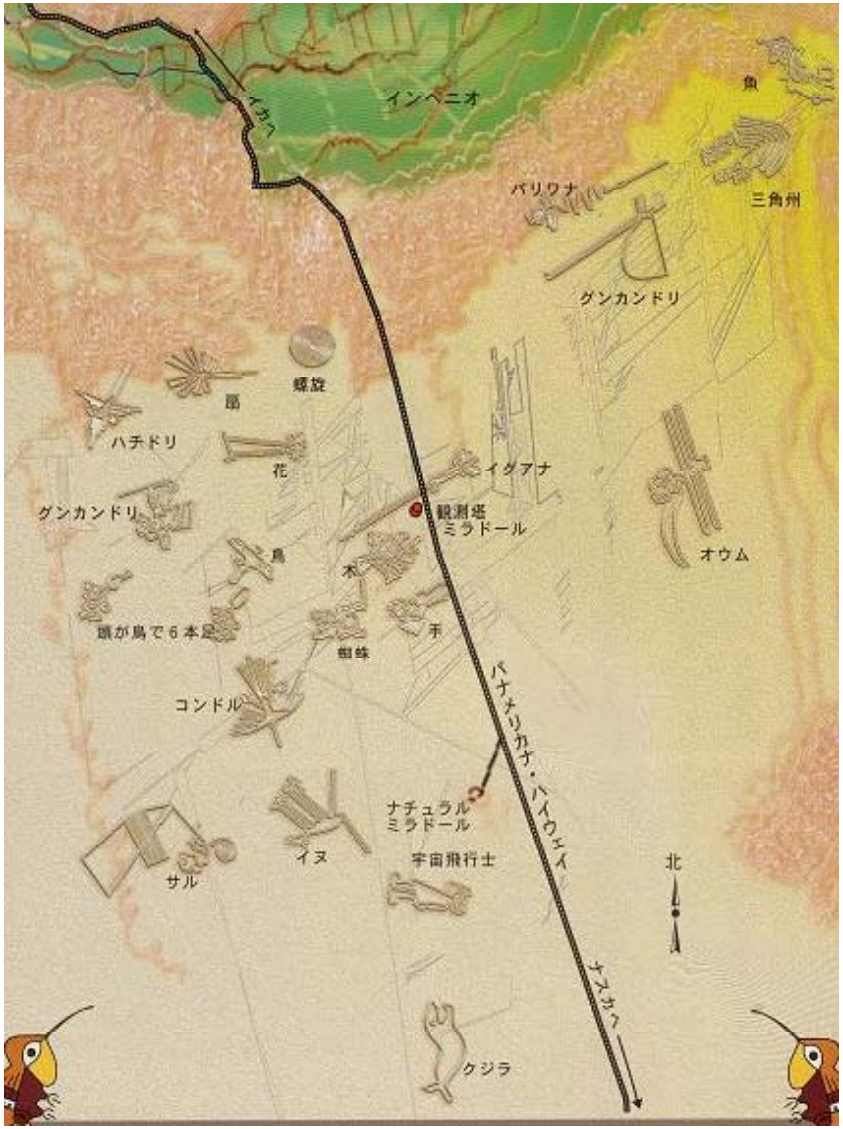
蜘蛛の地上絵

この空港にはクスコで入院していた二人の女子大学生も体調回復して、車で送って貰い駆けつけてきた。何はともあれ元気に旅ができるようになったことは同慶の至りである。

飛行機に乗って約1時間半、遊覧飛行をしたが沢山ある地上絵を目視確認できたのは僅か5点程であった。カメラで撮影してはみたが判然と絵だと判るものは一枚もなかった。ここでは地上絵の写真は「イポカンポのガイド・・ナスカの地上絵」所載のものを借用することにする。

ナスカの地上絵は紀元100年以前に広大な大平原の沿岸沙漠地帯に幾何学図形が刻まれた。何故どのように作られたのか世界の科学者達がたてた仮説は沢山あるが未だ真相は解明されていない。多くの謎と神秘に包まれた遺跡である。

ナスカ地上絵の見学を終え、リゾート地のパラカスホテルに夕方7時半に到着した。



地上絵の配置図

２００６年２月14日（火）

保養地パラカスでは高地の観光を恙なく終了したので、久し振りに痛飲した。海岸へ散歩に出ようとすると丁度入り日の時間であった。運良くサンセットを撮影することができた。

翌朝８時にはホテルを出て近くの桟橋からバジエスタ島行きのモーターボートに乗り込んだ。バジエスタ島は野鳥やアザラシ等の国立保護区になっており、かもめ、ゆりかもめ、あほうどり、海鳥、ペンギン、アザラシ等の繁殖地になっている。島へ向かう途中、船上から岩の上に描かれたカンデンブロの地上図を見学した。通称「蝋燭立ての燭台」と言われている。創作者や用途は不明である。

バジエスタ島に近づくと鳥の糞の臭いが鼻をつく。島には夥しい数の鳥達が群れていた。

パラカス海岸の日没

パラカス半島をモーターボート上から遠望

カンテンブロの地上絵

バジェスタ島遠望

見学にきたモーターボートと海鳥

岩に休息する海鳥の群れ

アザラシの群れ

洞門とアザラシの群れ、穴の下の黒い塊がアザラシの群れ

ペンギンの群れ

バジェスタ島の観光を終え、リマへ戻りリマ空港からトロント空港を経由して成田空港へ帰国した。

最後に帰路リマ市内で車窓から撮影した海岸と人家の密集した丘の写真を掲げておこう。